

——深求・川にちなんだ万葉集の歌——

万葉の川心 第9回

船田 園子

みか
二香の原の新しき都を讀むる歌一首 短歌を并せたり

やまし
山背の久邇の都は 春されば 花咲きををり 秋されば 黄葉にほひ

お
帯ばせる 泉の川の上つ瀬に 打橋わたし 淀瀬には 浮橋渡し

がよ
あり通ひ 仕へまつらむ 萬世までに

(巻第十七 三九〇七)

楯並めて 泉の川の 水脈絶えず

仕へまつらむ 大宮處

(巻第七 三九〇八)

右は、十三年二月に、右馬頭境部宿禰老鷹作れり

「新しい」という言葉は常に未来からやってくる。その言葉には、誰もが未知への期待と少しの不安と、そして眠っていた何かの心のどこからか沸いてくるようなときめきを感じる。新しい年、新しい住まい、新しい人生。そこには祝いの心があり、歌がある。

天平十二年、都は平城京から京都府相楽郡の久邇京（恭仁京）へと遷された。この地は泉川（今の木津川）の恵みを受け、山も近く、山河を称えた都にすべき美しい地であったのだらう。大伴家持も「今造る 久邇の都は 山川の 清けき見れば うべ知らすべし」（巻六 一〇三七）と詠んで、この地の澄んだ清らかさを見れば、都とするのもつとまなことであると歌った。



木津川 京都府/加茂町

この頃、国内は大飢饉と伝染病（天然痘）に苦しめられ、対外的にも不穏な情勢にあった。都を新しく遷すという大事業にはいつも多くの期待がかけられる。平城京から恭仁京へ通じる道ができ、泉川には恭仁大橋が架けられ、都市が生まれた。大地に道ができ、川には橋が架かる。そこに人は行き交い、様々な人生がすれちがう。いくつもの「新しい」何かと出会い、融合され、また「新しい」何かへと発展していく。

「山背国の久邇の都は、春になると花が咲きほこり、秋になれば黄葉が色美しくにおいたつ。帯のようにめぐる泉川のそのうえに、上の瀬では板の懸け橋を、淀瀬には浮橋を渡して、いつも通って万代までもお仕え申し上げよう。」あわせて短歌「泉の川の水脈の絶えないように、いつまでも絶えることなく、この大宮にお仕え申し上げよう。」山につけ、川につけ、花を詠み、流れを歌い、新しい都は多くの人に讃められたことだらう。万葉集の中で、わが国のことを「言魂の幸福国」といった歌がある。言の葉に宿る不思議な霊威が、それを現実のことにしていくという言魂の力は、古代から人々に信じられ、今も私たちの心に知れずと宿っている。